

# コミュニティデザイン Journal vol. 29

2020年8月15日

KCDラボ  
で検索!



研究所  
KOBE北・コミュニティデザインLab.

社会福祉法人陽気会

## 巻頭言—「再帰的」な社会で…—

「再帰性 (reflexivity) とは、「対象についての言及や観察の行為自体が、その対象に影響を与えること」(『広辞苑』)とか、「自分の過去の振る舞いを反省的に捉え直して、それを反映させながら自分自身を変化させていくこと」(『社会学用語図鑑』)というような意味で用いられる社会学の用語です。ブレア政権時代のイギリスで、そのブレインとして活躍したアンソニー・ギデンズというイギリスの社会学者が用いたことで広く普及した概念です。

私たちの暮らしているこの社会には「構造」があります。しかし、それは変化しない普遍的なものではありません。たとえば、家父長主義的な考え方や構造があります。また、「男性が働き、女性は家庭を守るべき」という規範もあります。しかし、こうした構造なり規範は時代と共に変化し、今日では家父長の権限は弱まり、主に夫だけが働く片働き世帯より夫婦共働き世帯のほうが多くなっています。

このように実は社会の構造は固定的ではなく、人々の行為により変化し、再生産されています。ギデンズはこうした社会構造の変化のプロセスを分析することが社会学の課題であるとし、「構造化理論」として整理しました。

さて、近代以前の社会では、たとえば、日の出と共に農作業をし、日が暮れると就寝するというように人々は限られた範囲の空間と時間 (= 地域共同体) のなかで生活していました。つまり、ある地域や特定の文化、伝統のなかに「埋め込まれた」生活をしていたのです。ところが、社会が近代化してくると、通信技術や輸送技術、移動手段が飛躍的に発展し、そうしたローカルな空間と時間のなかで自足していた状況から切り離され (= 脱埋め込み)、無限の広がりをもった空間のなかで、世界中で活動することが可能となり、24時間フルに稼働し続ける時間のなかで生活するようになります。こうした状況をギデンズは「脱埋め込み」と概念化し、人々が「埋め込まれた」文化や伝統から解放されると考えたのです。

文化や伝統に縛られた社会では、人々は社会の規範やルールを自然に身につけ、それに従って行動するので、選択の余地がほとんどない代わりに、行動することに迷いが生じることはありません。しかし、そうしたローカルな文化や伝統、習慣などから自由になると、人々は自分の考え方や振る舞い方を社会から学び、絶えず自分を更新し続けなければならなくなります。このように社会での生活を通じて、自らの過去



よろこび荘 壁画作品

の行為を反省的に問い直し、自身の行為に反映させるように、自分を反省的・自覚的に更新していくことを「再帰性」といいます。たとえば、新聞やテレビ、SNS などを通じて、「発達障害」という概念を知り、反省的・自覚的に自らを「そうか、私は『発達障害』にちがいない」というように自己規定するような状況になるのです。

私たちは、自分に対する認識を社会へと発信し、社会というフィルターを通して、再び戻ってきて (= 再帰)、またそれが社会のフィルターを通して確かめられ…ということを繰り返すことで自分という存在を確かめるような社会に生きているのです。前近代—近代 (モダン)—現代 (ポストモダン) というような時代区分がありますが、ギデンズは現代は近代の特性である「再帰性」をより徹底させている時代だと捉え、「再帰的近代」と呼びました。

よく「あなたの『本質』は…」というようなことがあります。しかし、そのような固定的な「本質」は、実はありません。なぜなら、たとえばある人からそのように指摘されることでその人は影響を受け、少なからず変化するからです。また、そう指摘している人も不変ではあり得ません。私とあなたは、関係のなかで事後的に構成され確認されるのです。関係のなかで私もあなたも変化します。つまり、常にお互いが「つくり・つくられている」のです。そして、社会も日々こうして、つくり・つくられ、変化し続けています。

再帰性 (つくり・つくられる度合い) が高まると、自由と選択可能性が高まり、同時にそれだけ不安定になりますが、こうした事態へも、再帰性で対処するしかありません。つまり、「対話」によって、お互いが変化し、関係そのものを変え、新しい「私たち」を再帰的につくることで、不安定な社会に手応えと安定をもたらす取り組みを続けることが大切になるのです。

KCD ラボ代表 松端克文

## シリーズ 情勢分析と運営・実践の処方箋 今月のテーマ：社会福祉における「主体性」の尊重

### ◆社会関係の「主体」的側面

日本で社会福祉が学問として本格的に論じられるようになるのは、戦後になってからである。たとえば、日本社会福祉学会が創設されたのは1954年である。この前後の時期には「社会福祉とはなにか」という問いをめぐって、「社会福祉本質論争」といわれる活発な論争が行われている。

社会福祉を捉える場合、いくつかのタイプがあるが、この時期の論争をふまれば、大きくは2つに分けることができる。ひとつは、孝橋正一や一番ヶ瀬康子に代表される資本主義社会が構造的に貧困を中心とした生活問題を生み出すため、そうした問題に対して、国家が政策的に対応すべきであるとする立場である。ここでは国民の社会福祉を受ける「権利」と国家が法制度的に対応する責任が問われることになる。

もうひとつは、岡村重夫に代表される立場である。岡村は資本主義社会という構造よりも、私たちが社会生活をおくる上での「社会関係」に着目した。生計を立てるためにはお金（経済的安定）が必要であるし、そのためには働いて賃金を得ることも必要となる。子どもであれば（もちろん子どもだけではないが）教育を受ける必要があるし、病気になれば医療が必要となる。生活を営む上では家族という形態が重要であるし、社会的に共同・協同することや、文化や娯楽の機会も必要となる。しかし、社会生活を送る上では、こうした社会関係が形成できないことも多い。したがって、社会福祉が対象とするのは、そうした社会関係がうまく結べないという状況であり、社会関係がうまく結べるように調整するところに社会福祉の機能を求めたのである。したがって、「障害者」だから社会福祉の対象になるのではない。たとえば「障害」があることで、仕事に就けないとか、十分な収入が得られないといった状況に置かれていることで、社会福祉（による支援）が必要となるのである。

そして、岡村が強調したのは、社会の側から社会関係を調整するのではなく、あくまでも本人の側（社会関係の「主体」的側面）から調整すべきであるということである。たとえば、極端に言えば、障害のある人が、「障害を克服」して社会に適応するのではなく、社会の側が個々の「障害」の特性に応じて「合理的に配慮」し、その人が学びやすく、働きやすく、暮らしやすい社会にしていかなければならないということである。社会福祉あるいはソーシャルワークは、このように本人の側から、その人が社会で暮らしていきやすいように支援していくことなのである。

### ◆支援を受ける側こそが「主体」という考え方

こうした戦後の社会福祉本質論争も決着をみないまま今日に至っている。なにを問題にし、どこに着目するのかというものの論じ方は多様なので、どれが正しいのかとはいえないが、ここでは社会福祉を必要としている人、支援を受けている人の「主体性」という観点に着目してみる。社会福祉というのは、生活していく上で困難な状況に置かれている人を支援する行為のことをいう。たとえば、社会福祉の歴史として紹介される慈善事業、博愛事業などは、困っている人たち

をどのように助けたのかということの説明するものである。ソーシャルワークの理論や方法にしても、支援の専門職であるソーシャルワーカーのことを説明したものである。

このようにそもそも社会福祉は、支援をする側の論理であり、その行いや政策、制度を説明するものなのである。それだけにどうしても押しつけがましきやおせっかいの側面が強くなり、構造的に「利用者」が不在になりやすい。だからこそ、利用者の「主体性」や「自己決定」などが重視され、強調されてきたのである。

### ◆利用者が「主体」であるということ

では、この利用者が主体であるということをもどのように捉えればよいのであろうか。少し福祉からは離れるが、ヒントになるので、『奇跡のリンゴ』（幻冬舎、2008）についての話を紹介する。木村秋則さんは、青森県弘前市で30年にわたりリンゴの無農薬・無肥料栽培に挑戦してきた人物である。きっかけは人がなにもしなくても草木は葉を繁らせ、花を咲かせ、種を実らせるという「なにもしない農業」の思想のもと、農薬も肥料も用いず、自然農法で米と麦を栽培しているという本との出会いにある。木村はこの農法をリンゴ栽培で行ったのである。減農薬栽培から始めて、完全な無農薬栽培に移行したのは1978年ころだった。

しかし、無農薬のリンゴ栽培はだれも試みたことのない取り組みであり、そのハードルは極めて高いものであった。リンゴはほかの果樹に比べてさまざまな病気に罹りやすく、虫も寄ってきやすいため無農薬での栽培は、「非常識」な挑戦であり、周囲の農家の理解を得られず、自分のところの農地にも被害が及ぶと激しく非難されたりもした。しかも、リンゴが出荷できないために、経済的にも困窮する。それでも害虫は1匹ずつ手で取り、農薬のかわりに胡椒やトウガラシ、塩、焼酎、酢…。有望と思える食品を片っ端から散布するなど、試行錯誤をしてみるものの、病気と害虫に喰い荒らされ800本あるリンゴの木はどんどん弱り枯れていく。

1985年の夏、万策尽き失意のなか、岩木山の奥深い森のなかでロープを木の枝にくくりつけようとするがうまくいかない。「この期になってもへまをする」。そう思って見つめた先にリンゴの木を発見する。実際はドングリと見間違えていたのだが、その木の下は雑草が生え放題で、地面は足が沈むほどふかふかだった。

これを機に硬い地面に科学肥料をまいていた土壌も見直し、雑草を生え放題にして、無肥料にした上で栽培することにしたのである。こうした経緯のもと無農薬・無肥料のリンゴ栽培に成功する。切っても酸化せず、だれも口にしたことのない美味のリンゴは、「奇跡のリンゴ」といわれる。こうした取り組みを称賛された木村は、「私じゃない。リンゴの木が頑張ったんだよ。人間はどんなに頑張ってもリンゴの花ひとつ咲かせることができないんだよ」と答えている。それぞれの人がある人の個性を輝かせることができるように、支援者自身の関わり方も含めて、その人の社会関係や生活環境を調整する。その輝きは、だれかが与えるものではなく、その人自身が放つものなのである。 KCD ラボ代表 松端克文

（武庫川女子大学文学部心理・社会福祉学科教授）

\* 毎号ホットなテーマを取り上げ、ヒントを提供します。

## ～ MILIZE (みらいず) by しごとサポート北部 ～

7月25日(土)しごとサポート北部において、新型コロナウイルス感染症の予防対策を徹底した上で、「第3回 MILIZE」が開催されました。コロナの感染者数が徐々に増加傾向にあるなか開催された経緯と共に、その取り組みについてセンター長の澤村氏に話を伺いました。



くつながつた関係性も分断されがちです。ほかの人との関係をつなげられるような場所を提供できれば…という思いで「MILIZE (みらいず)」を開催したいと考えています。



### —この状況で開催された経緯は？

1月と2月はだいたい10名ぐらいの参加者がありましたが、残念ながら新型コロナウイルス感染症の影響で、2月以降はずっと中止にしていました。緊急事態宣言解除を受けて7月の開催決定をしたところで、徐々に感染者数が増加傾向となりました。中止にすべきかどうか何度も検討を重ねましたが、利用者の方々からの開催への要望もあったことや、この時期だからこそ顔を見て話すことが必要であると判断したことから、感染予防対策を徹底し7月25日に開催することにしました。参加者は少なかったのですが、喜んでいただけてよかったです。

### —今後の開催については？

残念ですが、8月は中止することにしました。お盆以降の感染状況も心配ですし、今後の開催内容や通知の方法については、さらに十分な検討が必要であると考えています。

秋ごろには、しごとサポート北部が現在の場所から引っ越す予定があります。現在よりも空間が狭くなるので、同じような内容では開催がむずかしくなるかもしれませんが、なんらかの方法で、これからも利用者の方々に安心して楽しんでもらえるよう検討したいと思っています。



「ここを利用者さんの要望に応じていける場にしたい」と語る澤村センター長。北区のひきこもりの方々にも、気軽に立ち寄ってもらえるような、ホッとできる居場所づくりを目指しているそうです。

先が見えないしんどい状況ですが、日常の感染予防をしつつ、コロナと共存しながら、いま自分たちができる目の前のことに取り組み、さまざまな人たちと一緒に理想の未来を描いていきたいと思っています。

(編集委員会)

### MILIZE (みらいず)

みらい IDEALIZE 理想を描く RELIZE 実現化する・叶える=MILIZE  
理想の未来を描き(=未来図)実現しようと頑張る人をイメージ

### —そもそも「MILIZE (みらいず)」とは？

北区にお住まい、またはお勤めの障害のある方々に、休日などに集まって交流していただく場です。しごとサポート中部にはアフターファイブ支援事業の「ドリーム」という催しがあるのですが、そちらまで行けない方たちに、同じように集まれるような催しができないか…そう考えて、月1回第4土曜日の13時～15時に開催しようということで、今年から始めました。



しごとサポート北部 センター長 澤村 友也 氏

### —どういったことをされるのでしょうか？

通常の面談よりもざっくばらんな雰囲気の仕事の話をしたり、体を動かすレクリエーションをしたりします。働いている人は、休日といってもなかなか自分ひとりでは余暇を過ごせない状況があります。ましてこのコロナ禍では、せつ々

## ～地域連携室 法人カンファレンス・カウンセリング室～

8月より、法人本部内に上記の「社会福祉法人陽気会 地域連携室 法人カンファレンス・カウンセリング室（略称：連カン室）」が立ち上がりました。

### ◆主たる業務

設立目的は、法人内外の関係機関や組織の連絡調整等のマネジメントやコーディネート（図1）を行うことで、さまざまな立場にある人と人をつなげる（図2）や、職員が「明るく」「楽しく」「気持ちよく」「力を合わせて」仕事に取り組んでいただけるようにサポートすることが、主たる業務になります。



図1 教育・医療等との連絡調整等のコーディネート



図2 人と人を繋ぐ（随時カンファレンス・カウンセリング）

### ◆具体的な業務

活動内容の詳細は以下のようになります。

- 地域の医療・教育・福祉との連携推進及び窓口（地域福祉に貢献）
- 職員の相談（カウンセリング）や利用者及び保護者の相談
- 支援方法についての相談
- 法人版 ソーシャルワークを担う人材育成用テキストの企画・編集・作成
- 法人版 チェックリスト（試案）の企画・作成
- 職員研修プログラムの作成
- 法人内カンファレンスやケース検討会の調整窓口・企画・進行・記録・報告
- 職員間連携の企画・運営

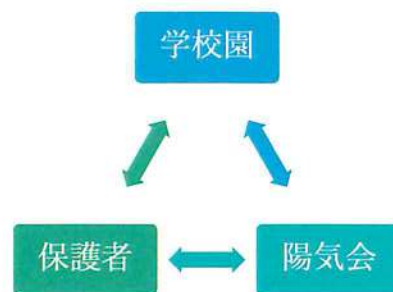


図3 支援チームとしての連携

地域の連携は、「現場レベル同士の連携が組織のチームとしての連携へ、組織のチームとしての連携が現場レベルへ」として機能するように、現場からの声がすぐに相手に届くネットワークの軽さと組織としてのつながりの両輪で連絡調整等を行っていきます。たとえば学校園との連携では、子どもを中心にしてそれぞれの立場でできる支援、共通にできる支援を三者（学校園・保護者・陽気会）が支援チーム（図3）として連携を深めることで、支援がより効果的に機能します。

職員の相談は、当室ができたことで、Lab.以外にも相談できる場所の選択肢が増えました。相談内容によっては、すぐにカンファレンスやケース検討会を行い、最善の支援方法を一緒に見つけていきたいと思っています。支援方法の相談では、現状分析を一緒にを行い、支援方法の改善や配慮につながる相談を目指していきます。保護者からの子育てやお子様の就学に関する相談等も行います。

これまで陽気会で培ってきた新人研修の内容をもとに、新項目も加え、いろんな方のお力を借りて法人版簡易テキストとしてまとめていく予定です。テキストに合わせた職員研修の実施も企画します。

### ◆今後の活動予定

本年度の3月末までに上記で述べた法人版簡易テキストを作成予定です。合わせて、法人版チェックリスト（試案）の作成を計画しています。「発達」の視点を重視したチェックリストです。ケース検討を行うとき、共通尺度として活用していきたいと考えています。領域ごとに、専門的な視点から、療法士に内容検討をお願いしています。各分野での発達の道筋を明らかにした後、質問項目を現場で観察できる方法やことばに修正したり、加筆したり、観察項目を加えたりします。各領域の次の発達段階がわかり、具体的な支援がイメージできる内容にしていきたいと思っています。陽気会の力を結集して作り上げていきますので、現場サイドでの必携の1冊につながればと願っております。

地域の学校園との連携は、各校園で関係機関との連携窓口である特別支援教育コーディネーターの先生との顔合わせがスタートになります。

部屋は陽気会本館2階です。随時、相談を受け付けておりますので、お茶を飲む気分で気軽に部屋を訪ねてください。

（連カン室 室長 高畑 英樹）

## 肉眼では見えない生物への意識 ～共に生きる③～

2020年1月16日国内初患者発生が発表され、4月7日には緊急事態宣言が東京都、大阪府、埼玉県、千葉県、神奈川県、兵庫県、福岡県の7都道府県に発令され、その後全国へと拡大発令されました。諸外国が実施した「ロックダウン」ではなかったものの、予想していたよりも心身ともに苦しかった自粛生活を経験しました。

5月14日から25日にかけて、段階的に緊急事態宣言は解除後も、「マスク着用」「ソーシャルディスタンス」「3つの密（密閉、密集、密接）を避ける」という新しい生活様式を意識しながらの日々を送るなかでの、新型コロナウイルス感染者の再びの増加に、不安と恐怖を感じている方が多いのではないのでしょうか。

### ◆新規感染者数

毎日、新型コロナウイルス新規感染者について報道されています。数百人という感染者数が毎日報道されると、その数にばかり気を取られがちですが、新規感染者数は「検査陽性者数」であり、「患者数」ではありません。まったく体調に異変を感じていない「無症状病原体保有者数」も含まれていることを忘れないでください。

緊急事態宣言発令された4月と現在とでは、PCR検査実施数も大きく違います。新規感染者数が増加した東京都の統計でみると、緊急事態宣言発令日と陽性者が初めて400人を超えた7月31日の検査件数を比較すると、約20倍に増えています。

日付	PCR検査数	陽性率
4月7日	271	31.7%
7月31日	5389	6.6%

(東京都 新型コロナウイルス感染症対策サイト)

毎日の報道を受け、新規感染者数が多いとの印象を受けますが、陽性率を比較すると減少しています。陽性率が減少しているのです大丈夫ということではありませんが、毎日の報道の「新規感染者数」だけを大きく報道されることによって、必要以上の不安を感じている方が多くいるのではと感じます。しかもこの6.6%の陽性者のなかには「無症状病原体保有者」が多く含まれているのです。

また、検査は100%間違いがないわけではなく、偽陽性や偽陰性もあることも知っておいてほしいと思います。なにか病気を疑って病院受診するときには、多くの検査を受けると思います。より正しい診断をするために、多くの検査結果を総合して判断し、医師は診断を行っているのです。

### ◆無症状病原体保有者

「無症状病原体保有者」とは、病原体が体内に侵入しているが、症状があらわれていない状態の人のことです。PCR検査や抗原検査では陽性となることがあります。

もちろん、症状がないから大丈夫といっているわけではありません。感染させる危険があることは確かです。「人に感染を拡大させる可能性があるのであれば、やはり怖いことに違いないではないか」と思う方もいるでしょう。怖くないということではなく、なぜ無症状なのに検査対象者になったのかを考えてほしいのです。

完全な無症状であっても、新型コロナウイルス感染症を発症した人（症状があり、検査で陽性と判定された人）の濃厚接触者と認定された場合、PCR検査が実施されます。そして、陽性者となるのです。濃厚接触者と認定された場合のみ、PCR検査が実施されます。濃厚接触者とされなければ、無症状で体調不良を感じていない人は、検査を受けません。こう考えると、検査を実施していないだけで「無症状病原体保有者」はとんでもない数が存在すると考えられます。

「自分の周囲に感染者はいない」「症状もないので自分は感染していない」とはいえないということです。国民全員にPCR検査をするべきだという意見も聞きますが、結果が「陰性」だから絶対大丈夫ともいえません。PCR検査「陰性」で、抗原検査は「陽性」だった例も多くありますし、PCR検査「陰性」の数日後、再度のPCR検査で「陽性」となる例もあります。無症状の人の検査に多額の資金を使うより、重症患者抑制のための医療・福祉の充実、感染対策などをさらに手厚く援助する方が、意味のあることだと思います。

そのためには、国民全員が「自分は感染しているかもしれない」と考え、可能な限りの感染対策を日々実施する必要があります。だれが感染していても不思議ではないのです。

### ◆感染症罹患リスク

しっかりとした感染対策をとったとしても、私たちが生きて社会生活を営む上で、感染症罹患リスクを「ゼロ」にすることはできません。どれほど医学が進歩したとしても、新しい未知の病原体出現を「ゼロ」にはできません。感染症罹患リスクや死亡リスクを「ゼロ」にはできないのです。

新型コロナウイルス感染症の日本における死亡者数(8/12 0:00 現在 厚生労働省発表)は現在1058名。平成30年度の熱中症での死亡者数1581名。同じく平成30年度のインフルエンザ感染症での死亡者数3325名。

新型コロナウイルスが怖くないとはいいません。ですが、この感染症だけが怖いわけではないのです。私たちは健康を損ねるリスク、命を脅かすリスクと常に向き合い生きています。

### ◆人間らしい生活と病原体との共存

新型コロナウイルス感染症は、すでに世界中のだれが感染しても不思議ではない状況にあります。まだはっきりわかっていないことも多くあります。感染防御のために、無菌室でだれとも接触せず生きていくことは不可能です。感染症には罹患しないかもしれませんが、人間らしく生きているとはいえないでしょう。

だれかを責め立てるのではなく、周囲の人とお互いを思いやりながら、人間らしい生活を確立していきたいものです。

(大島由香利)

## ちょっといいですか？大西ですけど…

(今回は、TVドラマ「半沢直樹2」を見ておられない方にはわかりにくい内容となっていますのでご了承ください)

### －「半沢直樹2」をやり返す－

#### ◆やられたらやり返していいのか？

TVドラマ「半沢直樹2」が視聴率を稼いでいます。私も、前作は完全制覇（視聴）し、今作もいまのところ見逃すことなく視聴率アップに貢献しています。半沢直樹といえば、「やられたらやり返す、倍返しだ！」というセリフが有名ですが、今作では、このアレンジ版でも話題を呼んでいます。「施されたら返し返す、恩返しです！」という大和田取締役のセリフがネットをざわつかせました。で、有名になったこの2つのセリフですが、銀行業界には通用しても、この福祉業界には通用しない内容だと思います（あくまで個人の感想です）。特に「やられたらやり返す」という言葉ですが、これは、この業界でいま大きな問題になっている「虐待」につながっているような気がして、好きになれません。

虐待をする職員は、多くの場合、利用者が自分に逆らったから、文句を言われたから、思い通りに動いてくれないから…などという自己本位の被害者意識を勝手に作り出し、その仕返しとして、相手（障害のある方）の心身を傷つけるという行動に出ます。これがエスカレートすると「やられてなくてもやり返す」という風潮につながっていきます。こうして虐待が常態化していきます。ここは、「やられてもやり返さない、それが支援だ！」というセリフでやり返したいと思います。

「施されたら返し返す」という言葉も、福祉業界にしてみればどうもしっくりきません。当然のことですが、この仕事は、いままで自分とはまったく無縁だった方々に対して、幸せになっていただけるよう支援をし続けていくことです。いままで自分自身には施しを受けてこなかった方々に対しても、施し（という名のサービス）を提供し続けていくことになります。そのような意味を含めて、これには「施されなくても返し続ける、それが福祉だ！」というセリフでやり返したいと思います。

#### ◆だまし合いはしていいのか？

このドラマのさらに興味深いキーワードは、「だまし合い」です。それも同じ組織のなかで起こるだまし合いです。その目的は、ほぼほぼ自分の出世のためということがわかります。敵か味方か、信用していいのかいけないのか、出世、出向、昇格、降格、左遷と、この業界には（あまり）縁のない言葉が飛び交います。お客様（利用者）のためなのか、会社（法人）のためなのか、自分のためなのか、この仕事をする目的を考えさせられますが、このあたりはまたの機会に触れたいと思います。（大）



## 陽気会は「福祉ゾーン」としてのコミュニティの創造を目指します

陽気会は、1958年9月1日に知的障害児施設おかば学園を開所し、61年目を迎えています。

私たちは、これからも私たちの生活の舞台としての“コミュニティ”をより暮らしていきやすくなるよう“デザイン”し、陽気会を拠点とした「福祉ゾーン」の創造を目指して、皆さまと力を合わせて実践していきます。

ラボサポーター(協会員)募集中です  
施設・事業所サポーター 年間 10,000 円  
個人サポーター 年間 1,000 円

陽気会の SNS が昨年 12 月より  
スタートしました！  
Facebook Instagram Twitter  
フォローよろしくお願いします

編集委員会：松端 克文  
朝日 満子・河津 真美  
大西 博之・太島 由香利

〒651-1313  
神戸市北区有野中町 2-5-19  
社会福祉法人陽気会  
KOBE 北・コミュニティデザイン Lab.  
Tel : 078(981)7271  
Fax : 078(981)0825  
HP : <http://youkikai.or.jp/>  
Email: [kcldlab@youkikai.or.jp](mailto:kcldlab@youkikai.or.jp)

